



写真：電気情報工学科4年 島本拓也「梅の花」



## 1 図書館長あいさつ

「図書館長より」

高松キャンパス図書館長 河野 通弘

## 2 教員によるエッセイ

「読書と想像力」  
「図書館に「こもる」喜び」

一般教育科（英語） 藤原 知予  
一般教育科（国語） 東城 敏毅

## 3 卒業生・修了生から

「卒業生より」  
「オススメします!!」  
「しなっせ。」  
「図書館の思い出」

機械工学科卒業生 中川 夏希  
電子工学科卒業生 戸谷 光尋  
創造工学専攻修了生 矢野 正人  
電子情報通信工学専攻修了生 柳本 卓哉

## 4 図書館貸出冊数〈平成23年4月～平成24年2月〉

## 5 教員・学生による推薦図書 全18編〈教員9編、学生9編〉

## 6 下半期ランキング〈図書、CD、DVD〉

## 7 図書館からのお知らせ

# 図書館長より

高松キャンパス図書館長  
河野 通弘



ちょうど後期末試験が終わった頃、最近夜中によく目が覚めることもあって、その日も眠れるかなと案じて眠りについたら予想通り夜半に目が覚めた。すぐには眠れないだろうと思って、深夜のラジオをつけた。2、3年前に98歳で亡くなった、明治44年生まれの女優さんが、90歳くらいの時に録音したトーク番組が再放送されていた。年齢にしては明瞭な声に多少の驚きもあって、その放送をじっと聴くことになった。そのなかでいい感じの話があったので、お話ししようと思う。

その女優さんは、若いころから老け役を多くこなしてきた方だが、老人役は好きだったらしい。老人は、見た目にはみんな同じように見えるけれど、その内面はその人が積み重ねてきた様々な思いが人格に投影されて深い、同じものはない、だから老人役が好きだ、といわれていた。人の内面的な個性や人格とは何だろうか、とそれから思いを巡らせる羽目になった。

自分は、街を気ままに歩き回るのが結構気に入っている。表通りよりも裏通り、それもちょっと怪しげなところに惹かれる。街に出るといろいろな風景や人間に出会うし、場所によれば奇妙な人物にもお目にかかる。そのなかには風采のあがらない、あるいは世間をすねているような輩もいる。そのとき、はっきりと若い時とは違う自分の反応に気づく。たとえば、この猫背のひとは、若いとき何かしようとして失敗したのか、躓いたときに何を考え、どれくらいつらい時間を過ごしたのだろうか、といろいろ思ったりする。ごく普通の人を見たときも同じで、平々凡々に見えるこの人も、普段どんなことを考えているの

だろう、何か重大な事件がこの方にあったのだろうか、などつい想像することがある。なるほどその女優さんがいったように、姿かたちは似ていて、たとえ見てくれがよくなくても、その人の内面はじつに深く複雑で、表現しきれないものをいっぱい抱え込んでいるのだろう。市井の人はみな、世界に自分だけの人格を備えていて、しかも自分の置かれた苦境(?)に耐えている。そう考えると、人は、それだけでじゅうぶん慈しむべき、すこし上等ないい方をすると、尊厳な生き物のように思えてくる。とはいっても、人のなかには(偉い人でも)新聞に出るような、恥ずかしい行為を犯すどうしようもない者もいる。これらの人も、人にちがいない。

このように人を観察したり思ったりすると、人は普段何を考えているか、その人の日常的な姿勢はどういうものかが大事だと思える。日常というのは些事の連続で、それだけを取りあげてもことさら特別に意味はない。が、このつまらなくみえることを何年、何十年も積み重ねていくと、成人病もそうだ(たとえがよくない)が、日常の些事の繰り返しがいかにか大きな意味をもつかに驚かされる。

さて、皆さんは、新入生のビカビカのもの、高学年の学生も、専攻科のおっさん学生も、春秋に富む柔らかさを若いゆえに持っている。日常のちょっとした訓練により、これからどんどん自分自身の内面を豊かにできる。訓練というと大袈裟だが、なにもむつかしいことではない。いろいろなことに興味をもって、散歩のように気軽にちよつとずつそれを繰り返せばよい。今は皆さんのあいだではそんなに大きなちがいがなくても、この訓練を日常的に継続してゆけるならば、10年後、20年後はどうか。人格の豊潤さにおいてきっと大きなちがいがでているのではないか、と思う。

図書館には、工学系の専門書はもちろん、それ以外の図書も多くある。人格形成の一助となる文学作品や歴史書、文化を継承する本もたくさん所蔵されている。今の時期だからこそ、自分のために役立ててほしいと願ってやまない。

## 教員によるエッセイ

### 読書と想像力

一般教育科(英語) 藤原 知予



読書、それは決して楽な行為ではありません。時間がかかるし、頭や心を使います。普通の高校生よりも多くの時間勉強し、実習し、さらに部活動など課外活動にと忙しい生活を送る香川高専のみなさんの中には、普段本を読む時間などない人も多くいると思います。

ところで、なぜ人は読書をするのでしょうか。感動、共感したい、現実逃避したい、批評眼を磨きたい、美しい言葉にふれたい、などなど色々あると思います。本と一口に言っても、いろんなジャンルがありますが、私は英国小説を専門に研究していますので、私が感じる「読み」の大切さを、英国での経験を交えながら少しだけお伝えできればと思います。

みなさんは、小説という文学形式の発祥の国が英国だということをご存知ですか。私は専門分野の研究のために英国に行ったとき、英国人が「読み」を大切にしていることを実感しました。私が滞在したのはケンブリッジ大

学のクレアホールという大学院でしたが、そこで私は多くの工学研究者と知り合いました。驚いたのは、工学を専門とする彼らの中に、文学作品に精通している人が数多くいたことです。毎日ラボに通い、実験やその分析、論文執筆などに追われている彼らが、バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)の詩集やD・H・ロレンス(David Herbert Lawrence, 1885-1930)の小説、谷崎潤一郎や村上春樹を読んでおり、それについて話ができることに大変感銘を受けました。その友人たちとは、休日に美術館に行って作品鑑賞し、意見を交換したり、自然の中をハイキングしてお茶をしたりしました。英国人は、文学や哲学・造形芸術などに親しみ、感性や想像力を磨くことをとても大切にしているようです。この国では、芸術や哲学は学者だけのものではなく、広くみんなのものなのです。例えば、ロンドンの地下鉄の列車の中の光景は、日本とは全然違います。日本の列車内は、大部分の乗客が携帯でメールをしたりゲームをしたり、携帯用プレーヤーで音楽を聞いています。しかし英国では、多くの人が電車の中で本を読んでいます。失礼ですが一見本など読みそう

にないような奇抜なファッションの若者までもが、おもむろにバッグの中から小説を取り出し、読みふけているのです。

この英国人たちの姿が、私に再度「なぜ人は本を読むのか」について考えさせてくれました。本につづられている言葉や知識、小説であれば登場人物の心理などはみな、何らかの形で読者の血となり肉となっていると思うのです。漢字や、きれいな日本語の言い回しは、知らない内に私たちの身につについて、論文やメールの言葉一つとっても洗練された言葉としてあふれ出ていくでしょう。小説を読み、心動かされたことのある人は、(もし私が主人公だったら)と考えることで想像力が養われ、日常生活でも相手の気持ちや状況を思いやることのできる人に成長するでしょう。私が考える真に教養ある人というのは、決して知識をたくさん持った人ではありません。自分を客観視し、相手の気持ちやその場の状況を想像力を使って理解し、公正で人間味のある判断を下せる人だと思っています。みなさんも想像力を養うために、図書館へ行って本を手にとってみませんか。

## 図書館に「こもる」喜び

私の体験から語らせていただく。大学院時代の話である。私の通っていた大学院の図書館には書庫が併設されており、その書庫に入れるのは院生の特権だった。当時の書庫は、本がびっしりと詰め込まれた、昼間でも暗い3階建の、いわゆる「穴倉」という趣だった。大学院時代は、この書庫に授業以外は朝から夜までひたすらこもっていた。書庫の本棚と本棚の間には申し訳程度の机があり、その机に本を山積みにして、ゼミや学会発表や論文の準備をひたすらしていたのである。机の横にはこれまた申し訳程度の小窓がついていて、この窓からは歴史のありそうな古びた石灯籠などが見下ろせた。はっきり言えば、とことん暗くて寒々しい風景だったのだ(実際冬などは底冷えがして足が震えたものだ)。そして、夜になると書棚の間にある机の電燈が、ポツリポツリとつき始め、自分のような院生がたくさんいることが実感できた。

この光景が研究にはふさわしかった。貴重書までも含めた奈良時代から近代・現代にいたるまでの日本文学の資料がほとんどそろっており、手の届くところにそれらの知的な文献が自分を取り巻いている状況は、研究にどれだけ寄与したか分からない。そして、私がここで言いたいのは、その文献の資料的価値のことではなく、書籍が自分を取り囲んでいるという状況こそが自分を駆り立てたという事実である。夜9時になると、書庫は閉鎖され、院生はまるで洞窟から這い出るように、書庫から吐き出される。そこに親友を見つけ、そのまま駅前の居酒屋に「こもる」。そこで今研究している内容や将来のことを語り



一般教育科(国語) 東城 敏毅

合ったことも、大きな意義があったことをあわせて言っておきたい。

現在、本大学図書館はビルに変わり、一階にカフェまでできたおしゃれなものにかわった。書籍はほとんどが開架に変わり、院生のみならず、学部生も外部から来られた方も、夜10時になっても煌々と明かりがついた閲覧室で書籍を手にする光景に変わった。これはこれですばらしいことであるが、私自身あの穴倉が懐かしい気もする今日この頃である。

さて、私の体験で終始してしまっただけで、ぜひ皆さんも図書館に「こもる」喜びを実感してもらいたい。公立や地域の図書館、大学図書館、また本校の図書館でも、どのような図書館でもいい。何気なく足を向け、少しの時間でもいいから図書館に「こもる」。そして、書棚をぶらぶらしながら何気なく気になった本をパラパラ開いてみる。何気なく触った本を読んでみる。そこに自分の人生を変える大きな「意味」が込められているかもしれないのだ。図書館に「こもる」喜びは、全く予期しなかった本に出会えることだ。そして、全く自分の専門とも関係ない、予想も期待もしなかった本にこそ、案外自分の考えていたことの答えや、自分の悩みを解決できるような意味が込められていることがあるのだ。

そのような出会いを見つけるためにも、まずは、図書館に「こもって」みよう。最初は「居眠り」のためでもいい。さぞ静かで寝心地がよいことであろう。

# 卒業生・修了生から

## 卒業生

### 卒業生より

機械工学科卒業生 **中川 夏希**



皆さんは文章を読む、ということをごどれくらいしますか(もちろんマンガや映画の字幕は含みません)?私は中学時代にとあるゲームの後日談が小説化された物を皮切りに単行本からライトノベル、ケータイ小説まで、ジャンルも様々な雑食派です。だから皆さんに本は読むべきだとかこの本はオススメだとか言うつもりはありません(まあ、オススメの本は5年間で随分と紹介しましたが)。私が伝えたいのは、どんなに読書をするのが嫌いな人であっても、

その人の心をつかむ文章が1つはあるということです。だから特別に時間を取って本を読めとは言いません。ですが高専での生活中にふと時間が空いてしまうという時が割とあります。そんな時に図書館に訪れて本を手にとってくれると私としては嬉しいのです。どんな本が自分にとって面白いのか分からない、なんて人でもタイトルや表紙を見ながら探せば気になる本の1つや2つは見つかると思います。なんせこの高専の図書館には高専生の趣味で入れられた本が沢山ありますから。もし、普通の本屋などで気になる本が見つかったけど、買うのはな、なんてことになった人は、クラスの図書委員を捕まえて高専の図書館に入れるなんてことも出来ます。私としては、これがきっかけでなくとも本を好きになる人が増えれば嬉しいな、と思います。

### オススメします!!

電子工学科卒業生 **戸谷 光尋**



図書館に入ってまっすぐ9番プレートの書架の通路、物語の詰まったその狭い空間はこの5年間何度も足を運んだ場所です。ふりかえればずっと本を読んでいた高専生活でした。5年生になった今では、並んでいる本を眺めてその内容を思い出すだけでも時間はあっという間に過ぎていきます。割りと楽しいですよ?

本から得られるものは知識だけではありません。魅力的なストーリー、登場人物の行動や考え方、クライマックスでのたったひと言などからパワーをもらうことはたくさん

あります。そんな本は何回読んでも色褪せることはありません。読むたびに感動できたり、生きる力をくれたり、精神的に倒れてしまわないように足元を支えてくれます。そしてそんな本は決して難しい事について書かれたものだけではないと付け加えさせてください。

最後にずっとやりたかったこと、私のおすすめの本を紹介します。退出ゲーム(初野晴)、ぼくのメジャースプーン(辻村深月)、100回泣くこと(中村航)、きみの友だち(重松清)、七つの海を照らす星(七河迦南)、午前零時のサンドリヨン(相沢沙呼)、恋愛寫眞(市川拓司)、屍鬼(小野不由美)、鴨川ホルモー(万城目学)、MOMENT(本多孝好)、その時までサヨナラ(山田悠介)、すべて図書館で見つかります。

それでは皆さんがこれからすばらしい本にめぐり逢えますように。ありがとうございました。

## 修了生

### しなっせ。

創造工学専攻修了生 **矢野 正人**



本科五年間の図書委員に専攻科二年間のアルバイトと、高専生活七年間ずっと図書館と関わっていられた。それは本を読むことが大好きな僕にとって幸せなことだった。

小さな頃から本を読むのが大好きだった。始まりは小学生の頃にはやみねかおるの「夢水清志郎シリーズ」に嵌ったことから。中学ではラノベに嵌って電撃文庫と講談社ノベルスを読み耽った。この頃に毎月幾らかの本を買っては積み積んでは読みの、今でも続く日常のフォーマットが出来上がった。

高専に入ってからは悪い遊びを覚えて読書量は幾らか減ったのだけど、分野は広がった。切欠はたぶん森見登美彦の「夜は短し歩けよ乙女」を読んだこと。以来ハードカバーで買うことも増えて、財布は万年オケラだし積読

はチョモランマだし。今も手元にチョモランマの裾野がある。「絶海ジェイル」「かわいそうだね?」「道化師の蝶」「海を見る人」「パラダイス・クローズド」とかエトセトラ。中の「かわいそうだね?」がやや異色っぽいけど、これは図書館の本。綿矢りさは、昨年末に気配に手にした「勝手にふるえてろ」を読んで以来気になる作家だ。ちなみにこの本とも図書館で出会った。図書館はいい。読みたいけど買うにはハードルがある作品を取り敢えず読むことができる。割にそれから嵌った作家も多い。例えば菅田哲也がそんな感じ。

さて。字数が超過したので話を締めよう。

読書はいい。腰を据えて本を読むのは素敵なものだ。僕は頑なに小説ばかり読んでいたけど、本当は色々な本を読むのが一番。高専生だと新書とかブルーバックス。偶にはエッセイ集とか啓蒙書とか。学業に使う本とは別に、視界を拓げる為の読書というのは楽しいものだ。個人的には一番視界を拓げてくれるのは小説だと思ってるのだけど、それは個々人の趣味。学生のうちに。当然社会人になってからも。色々な本を読みなっせ、なんつって。おわり。